佐渡を世界遺産に

世界文化遺産登録に向けて

佐渡の金銀山史を彩る人々

○山師とは？

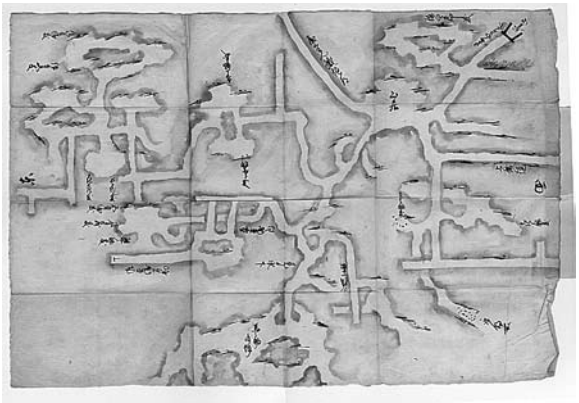
古くは御大頭衆（帯刀頭）と呼ばれ、その後、元和年間（1615～1624）に山仕・山主、正徳3年（1713）に山師と改められました。初期の山師は、一山・一坑を支配する鉱山経営者で、鉱山経営にかかわる様々な技術者を従えており、相川市街地などに屋敷を構えていました。このような山師たちは、石見国（現在の島根県）や伊豆国（現在の静岡県）などの様々な地域から集まっています。山師の中には、味方但馬・味方与次右衛門などのように巨万の富を得て、いくつかの地域の鉱山を経営する者もあらわれますが、鉱山の衰退によって次第に山師の人数も減りました。

◆相川新五郎町付近
豊部新五郎が拠点としたことから名付けられた町で、京町から大工町へ向かう途中にあります。

相川金銀山と相川市街地に残る山師たちの足跡

江戸時代から鉱山都市として発展してきた相川。その町並みを歩くと人名の付けられた町や坂が多いことがわかります。代表的なものだけでも、相川宗徳町（田中宗徳）・相川新五郎町（豊部新五郎のち蔵人）・相川勘四郎町（備前勘四郎）・相川庄右衛門町（大坂庄右衛門）・相川夕白町（備前夕白）・相川弥十郎町（丹波弥十郎）などのように町名となっているものや山師関原紋兵衛（主兵衛とも）の屋敷地付近の坂であったことから名付けられたという紋兵衛坂があり、金銀山繁栄の頃、多くの山師たちが住んでいた鉱山都市相川の特徴を物語っています。また、間歩とよばれる坑道には、開発者の名前が付けられることがあり、国史跡となっている「宗太夫間歩」をはじめ、「甚五間歩」・「弥十郎間歩」などの間歩名としてその名が残されています。

◆紋兵衛坂
山師の名が付けられた相川羽田町と相川八百屋町を結ぶ坂。



◆甚五間歩敷内絵図
山師の名が残る間歩の坑内図。左上の坑口からアリの巣のように坑道が掘られている様子がわかります。

鶴子銀山の山師秋田権右衛門

一方で、相川金銀山に近い鶴子銀山でも山師の足跡を見ることができます。戦国時代末期からの鶴子銀山のシルバーラッシュには、銀を求めて島外から多くの山師たちが集まったと考えられます。このような山師たちの中には、相川金銀山を発見した渡部儀兵衛・三浦治兵衛・渡部弥治右衛門がいました。また、江戸時代前期に鶴子銀山の屏風沢や仕出喜沢などで採掘を行った秋田権右衛門は、西五十里村（現在の沢根五十里、西野集落付近）を拠点として銀山を開発し、巨万の富を得たといいます。現在の西野集落には、秋田家の墓のほかに、権右衛門が再興した吉祥寺跡（のちに沢根の長安寺に合併）や金北山神社が残されています。寛永年間（1624～1644）に鶴子銀山の仕出喜間歩で大盛りを得た秋田権右衛門によって始められたという金北山神社の例祭神事には、それを象徴するように神輿に「金銀山」「大盛」の額が掛けられています。

◆金北山神社（沢根五十里）
山師秋田権右衛門の再興によるといわれる神社で、例祭神事では「金銀山」「大盛り」の額を付けた神輿の渡御が行われます。

◆教育委員会　世界遺産・文化振興課　☎27―4170